

明治維新の史学史—「社会科学」以前

三谷 博

明治維新の研究はすでに約150年の歴史を持つ。近年、歴史家たちの関心は大正期以降や第二次大戦後に向い、維新への興味は薄れているとはいえるものの、この間に蓄積された研究と史料は膨大である。到底、すべてを網羅し、適切な解釈をすることはできない。かつ、筆者はこれまで、あまり史学史に関心をもってこなかった。したがって、以下の考察は、かなり恣意的に対象を選び、解釈したものであることを予め断っておかねばならない。

さて、維新の研究は、その特徴によって、およそのところ、三期に分けて考えることができる。第一は同時代から明治末、1910年代までの政治史の時代、第二はその後、1960年代までの社会科学の時代、第三は経済の高度成長以来、今日までの多様性の時代である。ここでは、第一期の政治史の時代に絞って、その特徴を概観したい。

1. 幕末から明治初期の歴史編纂

維新に関する歴史叙述や史料編纂は、ほぼ同時代に始まっている。徳川幕府は開国のしばらく後、諸外国との間に交わされた外交文書の編纂を始め、大名家もそれぞれの政治的理由から家史の編纂を始めた。他の国々と同じく、日本でも、革命の研究は、政治家たちの事績を調査・記述したり、論評したりすることから始まったのである。歴史の政治的利用への強い動機は精力的な史料発掘を促し、かつ勝者と敗者の競争を通じて多様な維新理解を生むことともなった。それは同時に、バイ・プレーヤーであった多くの大名や政治抗争の圏外にあった庶民たちを歴史の蚊帳の外に置くことともなった。

維新史の編纂・記述のなかで最も初期のものは、越前松平家のそれではないかと思われる。その家臣中根雪江は、1859年、幕末の政治的動乱が始まった翌年に、幕府によって処罰された主君の冤を雪ぐため、1853年のペリー来航を起点として越前家の事績を書き始めた。彼はのち、1862年と1868年の諸事件について短い続編を著したが、越前家は後者の執筆された約20年後、1890年から1892年にかけて、それらの空白を埋める続編を編集し、ペリー来航から王政復古にいたる時期の越前家の幕末史を完成している¹。

越前家は徳川家の親藩のなかで三家に次ぐ4番目の家格をもつ大名であり、幕末には今日の民主政の源流となった「公議」運動のリーダーとなったことで知られる²。当初は薩摩などと組んで將軍家の専制・抑圧政策に対抗する勢力のリーダーとなり、明治新政権の発足の際にも無視し得ぬ役割を果たした。したがって、越前家の編纂した幕末史は、その豊富な史料引用も手伝って、明治政府のもとで正統視された王政復古史観、あるいは薩摩や長州に専ら注目する歴史解釈に対して有力な反証を提供している。のちに、最後の將軍徳川慶喜の伝記（徳川慶喜公伝、1918年刊）編纂にあたって中心的な史料として用いられ、さらに尾佐竹猛らの憲政史研究（1920—30年

代)でも重視された³。

他方、徳川幕府の外国方も幕末に外交記録の編輯を始めている。彼らは、1867年から、開港直後2年間の外交史料を編輯し始め、『通信全覧』をまとめた⁴。ペリー来航以前に編まれた近世外交史料の集成『通航一覽』や『続通航一覽』⁵の続編に当たる。この事業は、明治政府の外務省にも引き継がれ、幕府瓦解までを扱った編年の部は1879年に完成している。

他方、明治新政府も維新史の編輯を始めた。『復古記』という戊辰内乱(1868年)の戦史である⁶。これは、大政奉還以後約1年間の中央政局と戊辰内乱に関わる諸大名と公家の史料を網羅的に取めたクロノロジーであり、廃藩置県により大名家が公権力を失った後、1872年から17年の歳月をかけて編集された。刊行は1889年であるが、それ以前に綱文を集めた『明治史要』が刊行されている(1876年、追加編は1882年)⁷。王政復古、すなわち明治新政権の勝利を記述した書であるが、積極的な解釈は施していない。戊辰内乱は敵味方の明白な戦争だったが、しかし、そこに強い解釈を持ち込むと、王政復古を主導した薩摩と長州の間、また薩長とそれに味方した大名たちとの間に功名争いが起きる可能性が高かったためではないかと思われる。

『復古記』の着手後、明治政府は古代の六国史⁸をつぐべき日本史の編纂を企て、そのために、1876(明治9)年、各大名家に史料の提出を命じた⁹。旧大名家のうち、長州や薩摩のように資金や政治環境に恵まれた大名は、これを機にすでに着手していた家史の編纂を加速したが、一般的にはこの事業は遅々として進まなかった。当時の関係者は家禄処分後の生活再建、および西洋制度の移植による新体制の創出に全力を注いでおり、過去を振り返るゆとりがなかったからであろう。この状況が変化したのは、帝国議会が開会した1890年前後であった。

2. 初期議会期の史料編纂と史論の流行

明治憲法に基づく帝国議会の開会は、王政復古以来の政治的勢力配置を再編成するまたとない機会となった。立憲王政の制度化は、公平無私の王権の下に日本国民が平等の資格で秩序形成に参画することを可能にするものと解釈された¹⁰。王政復古の立役者たちだけでなく、維新の敗者も、新たな政界参入者も、議会への進出とともに、歴史の書き直しを通じて、明治国家の内部に自らの位置を確保しようと図ったのである。

この運動は、各大名家を単位とする史料編纂と、おりから活況を呈し始めたジャーナリズム上での史論との二つのレベルで展開した。

前者は1889年の「史談会」結成に示される¹¹。これは元来、島津家の動きから始まった事業であった。その請願を受けた宮内省は、前年、薩摩・長州・土佐・水戸に対して補助金を下し、維新における「国事諛掌録」を3年間で編纂・提出するように命じた。明らかに王政復古、およびその思想的基盤となった尊皇攘夷の思想と運動を主導した大名と皇室との関係を強調しようとする企てである。ところが、維新の家史の記述には関係ある諸大名と公家の史料の収集が不可欠であり、彼らの協力が必要となった。このため、4大名家は公家の三条・岩倉・中山3家と協力して「史談会」を結成し、孝明天皇の誕生から廃藩置県まで(1831—1871年)の史料収集を始め

ることとした。まず、宮内省から王政復古時に敵となった旧将軍家・会津家・桑名家、および味方となった尾張徳川家・浅野家に対して史料の提出を命じさせ、さらにその範囲を次第に広げて、1892年には琉球の尚家を含む255家を網羅するまでに至ったのである。この年、史談会は諸家の加入を得た上で組織を更め、史料収集を主な任務としながら関係古老の聞き取り調査もあわせ行うこととし、『史談会速記録』の刊行を始めた(1938年まで)¹²。これに伴い、最初の4家の国事訣掌録は各家に架蔵されるに留まることとなった。

大名家と公家による維新史編纂が解釈希薄なものとなったことは、明治維新と明治体制それ自体の性質をよく反映している。王政復古を薩摩と長州の同盟が主導したことは疑いない事実と見なされた。しかし、近世の政体が二百数十の大名の連合体であった以上、新政府の構成もその後の改革も、他の大名の協力なしには不可能であった。したがって、新政府の樹立を顕賞しようとする、必ず薩長以外の旧大名家の自己主張も発生する。政府が維新史の編纂に関わる限り、当代政治を混乱させないためには、薩長中心の記述をある程度抑える必要が生じ、いきおい史料の収集と羅列という方策に落ち着くこととなったのである¹³。

同時代には、史料編纂に別の動きも生じている。一つは、将軍家の遺臣勝海舟の編修した『海軍歴史』や『陸軍歴史』(いずれも1889年刊)である¹⁴。これは幕末の将軍家が行った洋式軍隊の編成に関わる史料集に過ぎないが、明治における文明開化の源流が徳川将軍家の改革にあった事実を提示し、それによって薩長主導の維新史に対抗し、これを監視する意味合いを担っていた。同年には旧旗本たちによって江戸会が結成され、雑誌『江戸会誌』を刊行し始めたが、江戸時代への懐旧を主としながらも、同様の意味を担われたと見て良いだろう¹⁵。もう一つは、民間のジャーナリスト野口勝一の『野史台』が継続的に刊行した『維新史料』(1887—1896)である¹⁶。大名家や官庁の背景なしに史料集を刊行したのであるが、これは明治20年代初頭に生まれた維新史ブームが、商業的な出版を可能にするほど大きなものであったことを示している。

他方、帝国議会の開会は、ジャーナリズムに維新をめぐる史論の刊行をうながした。中心となったメディアは、徳富蘇峰の『国民の友』(民友社)である。いずれもこの月刊誌への連載後、単行本として刊行されたが、その主なものには、竹越與三郎『新日本史』(上1891年、中1892年、下未刊)、福地源一郎『幕府衰亡論』(1892年)・『幕末政治家』(1898年)、徳富蘇峰『吉田松陰』(1893年)などがある¹⁷。

民間での維新史論は、維新に関する議論という広い意味にとると、福澤諭吉の『文明論之概略』(1875年)や田口卯吉『日本開化小史』(1877—82年)に始まる¹⁸。前者に見えるように、「文明」を近代西洋文明と等置した上で、人類史を「未開」から「半開」をへて「文明」に至る「開化」・「進歩」の歴史と解し、その中に日本を置いて、未来のあるべき姿を考えようとした著作である。これらと同じ発想に立ちながら、具体的な歴史上の事件や問題を、史料を収集・解説した上で描いた最初の書物は、おそらく藤田茂吉『文明東漸史』(1884年)であろう¹⁹。これは、西洋と日本の関わりについて戦国期からペリー以前までを概観し、その中で特にいわゆる「蕃社の獄」(1839年)を取り上げ、蘭学に対する権力の弾圧事件と見なして詳述したものである²⁰。

その背景には、著者自身の加わった民権運動と明治政府との緊張関係があったものと思われる。他方、1887年には、島田三郎の『開国始末』が刊行された²¹。これは、幕末の政治的動乱の発端をなした安政五年政変（1858年）で、幕府を代表して反対者たちを弾圧した大老井伊直弼の評伝である。井伊家所蔵の史料を基に、井伊大老の開国政策の正当性を示し、翻って明治政府の要人たちが幕末に展開した尊攘運動に疑問を投げかける、従来の維新像への挑戦の書であった。

このように民間の維新史論は、当初から明治政府との対抗関係をはらんでいた。これは、明治のジャーナリズムが、幕府瓦解後に民間に下った徳川の洋学者によって創始され、それゆえに「文明開化」という目標を政府と共有しながら、その先駆者として政府を監視するという姿勢を持っていたことに起因する²²。島田三郎はその典型例であるが、この態度は、徳富蘇峰のような維新の勝敗に無関係の土地から来たニュー・カムマーにも共有された。彼は熊本の高農出身で、自分自身は長州尊攘派の元祖で伊藤博文や山県有朋など当時の政府指導者の旧師であった吉田松陰の評伝を書いたが、彼はそれだけでは不十分と認識していた²³。幕府の側から書いた歴史もないと公平な維新史像は得られないと考え、もと長崎の町人で旧幕の外国方で働いた福地源一郎に徳川から見た維新史論の執筆を依頼したのである。福地は、旧幕出身ながら明治政府の代弁者として知られたジャーナリストであったが、にもかかわらず、彼の維新史論はいずれも、通常の維新史とは逆に、旧幕府を主とし、薩長などを客として書かれている。このような蘇峰の編集方針には、帝国議会の開会に対し、維新の勝敗を越え、出身地を越えた、新たな「国民」的地平の創出を期待するというメッセージを読み取ることができる。

初期議会期の史論には、単なる政治事件史や人物伝の域を越え、多様な視点と豊かな洞察を提示したものがある。蘇峰の『吉田松陰』は、松陰の人物像に深い洞察を与えただけでなく、徳川後期の社会に関する卓越した社会学的な分析を展開している。その点でさらに興味深いのは竹越與三郎の『新日本史』であろう。この書は上巻で徳川時代から国会開設に至る時期の政治史と外交史、中巻では社会・思想・財政・宗教の変遷を論じている。この書は「新日本・史」であって、「新しい日本史」ではない。つまり、維新前の「旧日本」に代わる「新日本」、すなわち民権の日本の誕生を描いた歴史である。特定のモデルによって体系的な分析を展開しているわけではなく、事実認識の誤りも少なくないが、しかし、ここには後世には認めがたい自由な発想が至るところに出現する。一例だけ挙げると、大革命に復古的革命、理想追求の革命、乱世的革命の三種があると述べた上で、明治維新は「決して回顧にあらず、決して理想にあらず、唯だ現在の社会に不満に、現在身に降り積もりたる痛苦に耐えずして発したる乱世的の革命たるや明かなり。……これを引きて勤王の感懐に出でたる復古的の革命と為すは抑も孟浪の言のみ。而して此乱世的の革命の動機は、実に社会の結合力漸く弛みて、將に解体せんとしたるにあり」と述べている。彼は、1) 維新の主題の座から世間で自明視されていた王政復古を外し、2) 革命を個々人や理念を越えた社会自体の自己運動として捉え、3) 革命を導く理念として、復古と進歩がともに働きうることを示したのである。筆者は、この観察をうまく組み替えれば、今日に至る維新史学がつねに失敗し続けてきた、維新の革命としての性質がより適切かつ

明瞭に把握できるのではないかと信じている²⁴。

3. 政治史の成熟と偏り

史談会の維新史料収集の事業は、1905年、文部省に引き継がれた。その後、1911年に至り、勅令によって維新史料編纂会が設置され、文部省に事務局を置いて史料編纂を始めた²⁵。それまでは史料編纂の主力は大名家であったが、以後は維新の元勳たちの発意によって、政府が直接に維新史編纂に関与することとなったのである。以前と同じく、この事業は薩長中心となるのではないかと疑念にさらされ、その業務はやはり史料編纂に限定された。各種史料を編年的に編修した史料が『大日本維新史料稿本』として一旦完成したのは、1931年のことである²⁶。その一方、外務省が行っていた外交史料の編纂も1906年に東京帝国大学文科大学の史料編纂係に移管された。これは直ちに『大日本古文書 幕末外国関係文書』として刊行が開始されている²⁷。

この明治末年から大正にかけての時期は、長年をかけて収集された史料が公刊されただけでなく、維新の政治史叙述が一応の完成を見た時期でもあった。一方では、維新の立役者たちの伝記が編纂されている。宮内庁図書寮編『三条実美公年譜』（1901年）、多田好問編『岩倉公実記』全3巻（1903年）、勝田孫也『大久保利通伝』全3巻（1910年）、やや時期が下るが妻木忠太ほか『松菊木戸公伝』全2巻（1922年編纂完）などである²⁸。同時に、それまで尊攘・倒幕運動の敵として発言の余地に乏しかった大名に関係する編纂物も公刊されるようになった。会津松平家に関わる北原雅長『七年史』（1904年）、山川浩『京都守護職始末』（1911年）や、彦根井伊家の中村勝麻呂『井伊大老と開港』（1909年）などである²⁹。

そのうちでもっとも興味深いのは、最後の将軍の伝記、洪沢栄一編『徳川慶喜公伝』全8巻（本伝4巻、史料4巻、1917年）である³⁰。これは、旧臣洪沢栄一が慶喜の雪冤のため福地源一郎に委嘱して編纂を始めたものであるが、一旦挫折した後、帝国大学の史学科を出た新進の学者に委嘱し、かつ慶喜本人の聞き取りを行い、その校閲を経て完成された³¹。慶喜手元の史料は瓦解時にすべて焼却されたが、公家と大名家に対して広汎な史料収集を行い、これに厳密な史料批判を加えて、幕府瓦解までの政治史の全体を叙述している。努めて評価を抑え、諸勢力の動きに広く目配りするスタイルをとり、引用史料は少ないものの、出典はきちんと記している。このため、本書は今日なお、幕末政治史を研究するものが最初に学び、かつ随時参照すべき書となっている。かつ、この編纂に関与した学者たちがその後発表した著作は、政治史の研究において、今日なお無視しえないものとなっている。藤井甚太郎、井野邊茂雄らの研究であり、とくに後者の『新訂増補 維新前史の研究』は、ペリー到来前の対外論を網羅的に分析した貴重な業績である³²。

他方、政治的には対極から出発しながら、同じく学問的批判に耐えうるレベルに到達したものに末松謙澄『防長回天史』全12巻（修訂版、1921年）がある³³。これは毛利家の委嘱と全面協力によって編纂が始められたものであるが、史談会がその業務を文部省に譲ったところに、編集長であった末松謙澄の単独事業となり、彼が全編を修訂することによって完成された。これまた、特定の大名家の事績顕賞から始ま

りながら、結果的には、長州に視座を置きつつ日本全体の政局を叙述する書となり、引用史料の豊富さと史料批判的確さが相俟って、アカデミックな批判に耐えうる古典となっている。

さて、維新政治史の到達点としては、文部省維新史料編纂事務局『維新史』全6巻(本編5、付録1、1939—1941年)に触れておかねばならない³⁴。これは「大日本維新史料稿本」を基礎に書かれた、官製のものとしては最初の解釈を伴う維新史である。孝明天皇の践祚から廃藩置県まで、きちんとした史料的裏付けをもって網羅的に叙述しているが、王政復古という目的論的な主題ゆえに生じたバイアスがあるほか、その後の研究で解明された側面も少なくないので、今日となっては鵜呑みにはできない³⁵。研究上は先行する前二著の方が有用な場合もある。

維新史料編纂事務局の時代は、維新の諸史料の公刊が相次いだ時代でもあった。先の『幕末外国関係文書』につき、「大日本維新史料稿本」を元にして『大日本維新史料』が刊行され始めたが、まもなく中断された。現在、「大日本維新史料稿本」自体が電子化されてネット上で閲覧できるようになっているが、稿本自体の作成は必ずしも慎重に為されたわけではなく、原史料から抽出する際に重要史料が欠落した例も少なくない³⁶。これに対し、維新史料編纂会の関係者らが結成した日本史籍協会は、会員制の予約を取って、重要史料を187冊刊行し(1915—1935年)、のち1970年代になって続編93冊を追加した³⁷。これらは、現在の維新政治史研究の基礎史料となっている。しかし、史料の選択は恣意的で、同じ史料でも一部のみの収録に留まった場合が少なくない。原本に当たることが必要であるが、関東大震災と第二次大戦下の空襲で焼失したのもあって、残念である³⁸。

維新政治史の研究で使われている史料は、したがって未だに偏ったままである。もっとも痛いののは幕府の史料のほとんどが無くなったことである。多くは瓦解当時に焼却され、遺った史料も、町奉行所史料を除いて、散逸したり、震災などで焼亡したりした³⁹。また、幕府の政治を主宰した老中の史料も阿部正弘や井伊直弼関係以外はまだ公刊されておらず、原史料が遺っていることが分かっている場合でも研究されていない⁴⁰。幕府政治を実質的に担った旗本の史料も手つかずである⁴¹。まして、政局の衝に立たなかった大名に関しては、譜代・家門と外様とを問わず、ほとんど研究されていない。王政復古時の敗者、そしてアウトサイダーは、史料の利用状況だけから言っても、無視され続けているのである。

むすび

以上、簡単に、維新の研究史を主に明治期について概観した。1920年代からの「社会科学」の時代とそれ以後については、他日を期すことにしたい。

1 中根雪江『昨夢紀事』上・下、八尾商店、1896年(復刻、日本史籍協会、全4巻、1920—1921年。同、日本史籍協会叢書、全4巻、東京大学出版会、1968年)。同『再夢紀事』日本史籍協会、1922年(復刻、『再夢紀事・丁卯日記』日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1974年)。村田氏寿・佐々木千尋『続再夢紀事』全6巻、日本史籍協会、1921—1922年(復刻、日本史籍協会叢書、全6巻、東京大学出版会、1974年)。

- 2 三谷博『明治維新とナショナリズム』(山川出版社、1997年)、第6・7章。
- 3 洪沢栄一『徳川慶喜公伝』全8巻、龍門社、1918年。洪沢栄一(藤井貞文解説)『徳川慶喜公伝』全4巻(伝記の部)、東洋文庫、平凡社、1967—1968年。洪沢栄一『徳川慶喜公伝』全3巻(史料の部)、続日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1975年。尾佐竹猛『維新前後における立憲思想：帝国議会史前記』文化生活研究会、1925年(増補改版、上・下、邦光堂、1929年)。同『日本憲政史大綱』上・下(日本評論社、1938—1939年)。同『明治維新』上・下、白揚社、1942・1942年(復刻、宗高書房、1978年)。いずれも次に再収録。『尾佐竹猛著作集』ゆまに書房、2006年。
- 4 『通信全覧』全6巻、雄松堂、1983年。外務省編『続通信全覧』(編年之部、全16巻。類輯之部、全30巻。雄松堂出版、1984年)。類輯之部の一部は、次にも収録。財政経済学会『幕末維新外交史料集成』全6巻、1942年(復刻、全6巻、第一書房、1978年)。
- 5 林煌編『通航一覽』全355巻、1853年(国書刊行会、全8巻、1912—1913年。復刻、清文堂、1967年)。『通航一覽統輯』全188巻(附録とも)、1858年(箭内健次編、清文堂出版、全5巻、1968—1973年)。
- 6 太政官編『復古記』全15巻、内外書籍、1929—1931年(復刻、東京大学史料編纂所編、全15巻、1974—1975年。同、マツノ書店、2007年)。
- 7 修史局編『明治史要』全5巻、博聞社、1876—1885年。修史館編『明治史要』上・下(本文、附録表)博聞社、1885—1886年(復刻、全2巻、東京大学出版会、1966年)。
- 8 『日本書紀』『続日本紀』『日本後紀』『続日本後紀』『文徳実録』『三代実録』(720—901年)。佐々木有義編『六国史』全11巻、朝日新聞社、1929—1931年。坂本太郎『六国史』吉川弘文館、1970年。
- 9 田中彰『明治維新の研究』北海道大学図書出版会、1987年、197頁。
- 10 この状況解釈は、旧幕出身で初代の帝国大学文科大学長となった外山正一の一連の論考によく示されている。外山正一『山論稿』前・後、丸善、1909年。
- 11 田中彰、181—190頁。
- 12 史談会『史談会速記録』1—411輯、1892—1938年(復刻、1—395輯、原書房、1971—1975年)。
- 13 伊藤博文は、1890年、金子堅太郎が酷使編纂局を設立して維新史の編纂を提案したとき、これを国会開設の政局運営の障害になるとして即座に却下した。田中彰、236—237頁。
- 14 勝安芳編輯『海軍歴史』全6冊、海軍省、1889年(海舟全集刊行会編、海舟全集、第8巻、改造社、1928年。勝部真長ほか編、勝海舟全集、第12・13巻、頸草書房、1971・1974年)。『陸軍歴史』全2巻、陸軍省総務局、1889年(海舟全集刊行会編、海舟全集、第6—7巻、改造社、1928年。勝部真長ほか編、勝海舟全集、第15—17巻、頸草書房、1976—1977年)。
- 15 『江戸会誌』1—2冊、江戸会事務所、1989年(博文館、全2冊、1889—1890年)。『同方会報告』・『同方会誌』1—65号、1896—1941年(復刻、立体社、1977年)。戸川安宅『旧幕府』1巻1号—5巻7号、1897—1901年(復刻、原書房、1971年)。江戸旧事采訪会『江戸』1—11巻、1915—1921年。
- 16 野口勝一『野史台維新史料』(1887—1896年。復刻、日本史籍協会叢書別編、全40巻、東京大学出版会、1972—1975年)。
- 17 竹越與三郎『新日本史』上・中(下、未刊)、民友社、1891—1992年(松島栄一編『明治史論集』筑摩書房、1965年。岩波文庫、全2巻2005年)。福地源一郎『幕府衰亡論』民友社、1892年(復刻、続日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1978年)。同『幕末政治家』民友社、1900年(復刻、『懐往事談・幕末政治家』続日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1979年。福地桜痴『幕末政治家』岩波書店、2003年)。徳富蘇峰『吉田松陰』民友社、1893年(復刻、植手通有編『徳富蘇峰集』筑摩書房、1974年。岩波文庫、1981年)。同、改版、1908年。
- 18 福澤諭吉『文明論之概略』福沢諭吉、1875年(松沢弘道校注、岩波文庫、1995年)。田口卯吉『日本開化小史』田口卯吉、1877—82年(嘉治隆一校訂、岩波文庫、1964年)。
- 19 藤田茂吉『文明東漸史』報知社、1884年(『明治史論集』筑摩書房、1965年)。
- 20 「蚕社の獄」に関する最近の解釈については次を参照。三谷博『事件史と裁判—蚕社の獄の場合』、東京大学教養学部歴史学部会編『史料学入門』(岩波書店、2006年)。
- 21 島田三郎『開国始末』完：井伊掃部守直弼伝』輿論社、1888年(復刻、続日本史籍協会叢書、全2巻、東京大学出版会、1978年。『島田三郎全集』第3巻、龍溪書舎、1989年)。
- 22 福地源一郎『懐往事談：附新聞紙実歴』民友社、1894年(柳田泉編『福地桜痴集』筑摩書房、1966年)。

- 稲田雅洋『自由民権の文化史』筑摩書房、2000年。
- 23 徳富猪一郎『蘇峰自伝』中央公論社、1935年。
 - 24 三谷博『明治維新を考える』(有志舎、2006年)、序章。
 - 25 田中彰、236—249頁。
 - 26 現在、電子化されて、東京大学史料編纂所のウェブサイトから閲覧可能である。網文を集めた『維新史料綱要』の次のサイトから入ることになる。<http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller>
 - 27 東京帝国大学文科大学史料編纂掛編『大日本古文書 幕末外国関係文書』1—22、1910—1939年。東京大学史料編纂所、同、23—30、東京大学出版会、1952—1960年。同、31—、1960—(2009年現在、文久元年3月15日までを刊行)。同附録全7巻。
 - 28 宮内庁図書寮編『三条実美公年譜』宮内省、1901年(復刻、宗高書房、1969年)。多田好間編『岩倉公実記』上・下、皇后宮職、1903年(改版、全3巻、岩倉公旧蹟保存会、1927年。復刻、全3巻、原書房、1968年)。勝田孫彌『大久保利通伝』全3巻、1910年。やや時期が下るが、妻木忠太ほか『松菊木戸公伝』上・下、明治書院、1927年(1922年編纂完)。
 - 29 北原雅長『七年史』上・下、啓成社、1904年(復刻、全4巻、続日本史籍協会叢書、東京大学出版会、1978年)。山川浩編述『京都守護職始末』沼沢七郎、1911年(遠山茂樹校注・金子光晴註、全2巻、東洋文庫、平凡社、1965—1966年)。中村勝麻呂『井伊大老と開港』啓成社、1909年。
 - 30 註3参照。
 - 31 聞き取りの記録は、洪沢栄一編『昔夢会筆記』1915年(大久保利謙校訂、東洋文庫、平凡社、1968年)。
 - 32 藤井甚太郎、井野邊茂雄らの研究であり、とくに後者の次の書は、18世紀半ばからベリ到来直前までの国内対外論を網羅的にかつ鋭く分析したものととして、未だに越えるものがない。『新訂 維新前史の研究』中文館書店、1942年。
 - 33 末松謙澄『防長回天史』初編—第6編、末松謙澄、1911—1920年。修訂版、全12巻、末松春彦、1921年(復刻、マツノ書店、1991年)。
 - 34 文部省維新史料編纂事務局『維新史』全6巻(本編5、付録1)明治書院、1939—1941年(復刻、吉川弘文館、1983年。附録に大久保利謙と小西四郎による「『維新史』と維新史料編纂会」所収)。これより先、簡約版として次が刊行されている。『概観維新史』明治書院、1940年。
 - 35 例えば、会津や徳川將軍家の歴史は、1990年代にようやく本格的な研究が公刊されるようになった。代表例に家近良樹の一連の仕事がある。会津をあつかった『幕末政治と討幕運動』吉川弘文館、1995年。同『孝明天皇と「一会桑」』文藝春秋社、2002年。同『徳川慶喜』吉川弘文館、2004年。同編『もうひとつの明治維新』有志舎、2006年)など、また徳川の外交と公議派大名をあつかった、三谷博『明治維新とナショナリズム』山川出版社、1997年。
 - 36 例えば、弘化3年に浦賀に米國艦隊が訪れ、通商を打診したとき、老中阿部正弘は幕府内部で、領主への海防努力発令・江戸湾口防備の強化と大船建造・異國船打払い令の復活の三点にわたる諮問を行った。稿本は、その原史料である佐々木脩輔『御備場御用留』からその前後のマイナーな史料を収録しているが、この根本史料は取り逃がしている。
 - 37 『日本史籍協会叢書』(三谷博執筆)、『国史大事典』11巻、1990年。
 - 38 例えば、旧越前松平家の史料は東京の屋敷に保管されていたが、空襲を避けるために福井に疎開され、その地で戦災にあって灰燼に帰した。今は、『昨夢紀事』などに掲載された引用部分のみが参照しうるに過ぎない。
 - 39 旧江戸城の多聞櫓に投げ込まれていた史料は、明治期に一部整理され、公儀日記などの冊子類が内閣文庫で閲覧可能になったが、未整理のものも少なくない。旗本の由緒書きなどについては近年に整理され、公刊された。小西四郎監修・熊井保・大賀妙子編集『江戸幕府人名事典』全4巻、新人物往来社、1989—1990年。
 - 40 渡辺修二郎『阿部正弘事蹟』渡辺修二郎、1910年(復刻、続日本史籍協会叢書、全2巻、1978年)。阿部家には正弘の先代などの史料を含め、かなりが遺っていたはずだが、今は神奈川県立博物館ほかに散逸したと聞く。老中水野忠邦・忠精らの史料は、首都大学東京の図書館に所蔵され、一部は写真版が公開されているが、本格的な研究はまだである。『水野忠精幕末老中日記』全6巻、ゆまに書房、1999年。

- 41 例えば、ペリー来航時にもっとも高い評価を得た上書を行ったもと勘定方向山源太夫、その養子で外交に活躍した向山黄村の父子については、良質な史料が大量に遺っている。そのごく一部は、大口勇次郎監修・針谷武志編『向山誠斎雑記』天保弘化編全26巻・嘉永安政編20巻・解説総目次1巻、ゆまに書房、2001年。